



深澤七郎の小説『樫山節考』とフランツ・アルトハイムの『小説亡国論』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大木, 文雄, ダールストローム, アダム メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00008302

深澤七郎の小説『榎山節考』とフランツ・アルトハイムの『小説亡国論』

大木 文雄

アダム・ダールストローム¹

北海道教育大学釧路校ドイツ文学研究室

Fukazawa Shichiros *Narayamabushiko* und Franz Altheims *Roman und Dekadenz*

Fumio Ohki

Adam Dahlstrom

Department of German Literature, Kushiro Campus, Hokkaido University of Education

要 旨

深澤七郎の『榎山節考』は、典型的に日本的な作品なのであるが、その作品が外国人にも理解され感動を与えることができるかというところから拙論のテーマは発している。筆者はこの小説『榎山節考』を、昨年平成14年度後期から今年平成15年度前期にかけて、北海道教育大学釧路校の外国人留学生のための授業「日本文化論」の教材にも使ってきた。この小説をこの授業の教材に取り上げたそもそもの理由は、勿論この小説が戦後の日本文学を代表する決定的な作品であり、日本文化を勉強しようとしている彼ら外国の学生たちにとってこの小説は最適の教材と思っていたからである。しかしそれと同時に筆者にはもうひとつの期待があった。それは外国の彼らも一体にこの小説にショックを受けるであろうか、そしてこの小説に感動するであろうかという一縷の望みを内に孕んだ密かな期待であった。そしてその期待は実現した。しかしその感動の源泉は一体どこからくるのであろうかというのがこの論文のライトモチーフである。拙論では特にハンガリーの神話学者カール・ケレーニーイ (Karl Kerényi 1897-1973) の根源神話 (Urmythologie) を援用しつつ、ドイツの古代史学者フランツ・アルトハイム (Franz Altheim 1898-1976) の著書『小説亡国論』を分析しながら、この『榎山節考』を比較検討している。スウェーデンのアダム・ダールストローム君は、国費研究生として北海道教育大学釧路校で日本文化を研究してきた。とりわけ彼はこの『榎山節考』に関心を持って筆者の指導を受けた。彼の論文には意味深いものがあると思われるのでここに補遺の形で掲載することにした。

I. はじめに

『榎山節考』についてインターネット上を探索してみるとこの小説にまつわる極めて多くの情報が流されているのを我々は知ることができる。その項目は優に3000を超える。著者深澤七郎 (1914-1987) は音楽家 (ギター奏者・作曲家) であると同時に小説家でもあるから、『榎山節考』に関

するインターネット上の内容は多義にわたっている。そこにはこの小説の中で唄われる数多くの歌についての記事もあれば、この小説が色々と映画化されたこと、その中でも今村昌平監督のそれが1983年にカンヌ国際映画祭でパルムドール賞 (グランプリ) を受賞したことについての記事もある。あるいは深澤七郎の生涯にわたる伝記もあれば、この小説の主要テーマとなっている姥捨て伝説についての歴

¹ Dahlstrom, Adam Kahl Kani Islam: スウェーデン、ストックホルム大学4年次学生、日本語・日本文化専攻、2002年10月〜2003年8月まで、国費研究生として北海道教育大学釧路校に留学、筆者の研究室で日本文化を研究した。彼の解釈は「補遺」のところで掲載されている。

史的な記事もある。勿論この小説の賛否両論についても読むことができる。あるいは日本ドイツ文学会が信州大学で行われたとき「文学と森林」というテーマでシンポジウムを組んだことがあるが、その中で「日本文学における森林」と題して『榎山節考』が取り上げられていたのを知ることができる。²

このように『榎山節考』についての情報は非常に多い。ところがそれに反して深澤七郎の他の作品に対する情報量は『榎山節考』に比べて極めて少ないことは驚くほどである。彼の長編小説『笛吹川』などについての情報もインターネット上ではほとんど探索できない。他の作品の場合も『笛吹川』と同様ほとんど情報がない。勿論そういう状況はインターネット上において極端に見られることなのであるが、それにしても深澤七郎の名声が『榎山節考』に全て収斂されてしまっているという事実は意味深い。例えば伊藤整はこの『榎山節考』を評して「この作家はこれ一作の人かもしれぬ」と書いたし、「正宗白鳥も同じような意見を述べていた」³が、その予言はほぼ的中してしまった。この作品が卓越した力をもった作品であることは広く認められたのである。そればかりではない。この作品は戦後の日本文学を代表する決定的な作品になってしまった。福田宏年などは、「私は戦後三十年の日本文学の作品の中でただ一作を選べといわれたら、ためらうことなくこの『榎山節考』を挙げたいとおもいます。」⁴とまで言っている。果たしてそれはこの作品のどういう点に見出されるのであろうか。拙論では特にハンガリーの神話学者カール・ケレーニーイ(Karl Kerényi 1897-1973)の根源神話(Urmythologie)を援用しつつ、ドイツの古代史学者フランツ・アルトハイム(Franz Altheim 1898-1976)の著書『小説亡国論』を分析しながら、この『榎山節考』を比較検討していこうと思う。

II. 外国人留学生にとっての『榎山節考』

ところで、筆者はこの小説『榎山節考』を、昨平成14年度後期から今年平成15年度前期にかけて、北海道教育大学釧路校の外国人留学生のための授業「日本文化論」の教材にも使ってきた。進度は一日2頁ほどである。彼らはスウェーデン、オーストラリア、ロシアから来た留学生たちなのであるが、極めて熱心に予習をしてこの授業に参加してきた。

この小説をこの授業の教材に取り上げたそもそもの理由は、勿論この小説が戦後の日本文学を代表する決定的な作品であり、日本文化を勉強しようとしている彼ら外国の学生たちにとってこの小説は最適の教材と思っていたからで

ある。しかしそれと同時に筆者にはもうひとつの期待があった。それは外国の彼らも一体にこの小説にショックを受けるであろうか、そしてこの小説に感動するであろうかという一縷の望みを内に孕んだ密かな期待であった。この小説が1956年第1回中央公論新人賞を受賞して以来、それは一躍ベストセラー小説の階段を上りつめ、日本の読者層に一大センセーションを巻き起こしたのであったが、それと同じような過激な感情がこの釧路校の外国人留学生の中にも起こりえるであろうかという期待である。なるほどこの小説は1958年に初めてフランス語に翻訳され、以来いろいろな言語に翻訳され世界中で読まれてきたのであるから、この小説は外国の読者にも受け入れられる素地があったということは自明のことであった。しかし直接このテキストを授業の中に持ち込んで外国人留学生と精読していくとき、そこに起こるさまざまな反応はフランス語等に翻訳された状況だけでは推測しえない問題性を孕んでいることもこれまた自明の理であった。

果たして筆者のこのようなほのかな期待はどのような結果にいたったのであろうか。これから少しく一縷の望みについて論を進めていきたいと思う。

この小説の最初から留学生たちは遠く離れた時間空間の世界に強烈に引き去られていったことは特筆すべきことである。

「山と山が連っていて、どこまでも山ばかりである。この信州の山々の間にある村——向こう村のはずれにおりんの家はあった。」⁵

こう読み始めるとざわめいた雰囲気、集中する静寂に変った。最初の一行目に四回も「山」の文字が出てくる。留学生たちは早くも山奥の異空間へと引き込まれていった。しかしこういう山奥の風景は彼らにとって全く想像もできない、見知らぬ世界ではない。たとえ「信州の山々」と書かれていてもスウェーデン、ロシアにもそれと同じような山々があり得るからである。しかしそういう人里離れた場所にある村の存在は、現代ではほとんど見出されず時間を過去に遡っていくときに見出される風景であるように思われる。

そういう過去の時間が設定されたところで、早速小説の中では不気味な「榎山まいり」の話が語られる。三島由紀夫は「中央公論新人賞」の選考委員の一人であり、この小説の読後感を「何かこわいというか『説教節』や『賽の河原』や『和讃』、ああいうものを読むと気分がずっと沈んでくる、それと同じ効果を感じる。」⁶と語っていたが、留学生

² 2001年度日本独文学会秋季研究発表会(信州大学キャンパス)シンポジウムⅣ、発表者:中島賢介。

³ 伊藤 整:「深澤七郎氏の作品の世界」、所収:深澤七郎『榎山節考』中央公論社、昭和32年、221頁。

⁴ 福田宏年:「精神医学から見た文学の諸相」、所収:『わが青春 わが文学Ⅱ』集英社、1979年、38頁。

⁵ 深澤七郎:『榎山節考』中央公論社、昭和32年、3頁。

⁶ 伊藤 整:前掲書、220頁。

たちは「榎山まいり」のくだりを読んでそろって強烈な衝撃を受けていた。しかし勿論留学生たちのこの最初の衝撃は、三島由紀夫の感じた恐れとは違うものであった。彼らのショックは、ある種の異文化へのそれであった。「えっ？ そんなことあるの？」「うわー、ほんとに？」と興奮して彼らは叫んだ。自分を産んでくれた親を70歳になったからといって、榎山に捨てに行くなんてなんと日本人は極悪非道なのだろうかというわけである。たとえ寒村のため作物の収穫が少なく白米（白萩様）もめったに食べることができず、赤ん坊（ねずみっ子）が次々に生まれてくるといった昔の食料不足の状態であっても、姥捨てなど以っての外と彼らは激しく主張した。留学生たちは、自分達を心やさしく育ててくれた両親のことを考え、自分達がそんな立場に置かれたとしてもそんなことできるはずではないかと思っていたはずである。

「榎山には神が住んでいるのであった。榎山へ行った人は皆、神を見てきたのであるから誰も疑うものなどなかった。」⁷というテキストのくだりに来たときも、榎山に神が住んでいるなんてそんなばかな、それはアニミズムにすぎない、とさも一神教としてのキリスト教の優位性をほめかしたがっているようであった。

「どこの家でも結婚問題などは簡単に片づいてしまうことで、好きな者同士が勝手に話し合ってきめてしまったり、結婚式などという改まったこともなく、ただ当人がその家に移ってゆくだけである。」⁸というテキストのくだりに来たときも、留学生たちはそれはあまりにも非文化的で、動物的だといって軽蔑した。

しかしそういう一等最初の留学生たちの異文化に対する拒否的な態度も、小説を読み進めていくうちに次第に変容していくのが筆者には分かった。死を準備するための壮絶な闘い。死に行く為、あの世に行く為の悲壮な準備。一見、姥捨てなどと軽はずみな行為と思われていたものは、実はおりんや辰吉の精神の深部から出てきたものであったということ、表層的なものとはかけ離れたものであったということが次第に読み進めて行くうちに留学生たちに理解されてきたからである。理解されてきたということは、死に行くおりんとそれを助ける辰吉たちのありようが、留学生たちの魂の琴線にも触れ始めたということを意味する。

例えば以下に挙げるような三つの場面が特に留学生の心を揺り動かした場面である。

第一のそれはおりんが意図的に自分の健康な歯を折る場面である。おりんは69歳に似合わず健康な歯を持っていたが、「榎山まいりに行くまでには、この歯だけは何とかして欠けてくれなければ困る」と思っていた。榎山まいりには

「歯も抜けたきれいな年寄りになって行きたかった」⁹からである。だからおりんは意図的に石臼の角に自分の歯を思いっきりぶつけて二本の歯を折ってしまう。まさにおりんの壮絶な死への準備である。妖気漂うこの場面は、昔から唄われてきたという俗歌の挿入によってその凄さが増長される。これほどまでして死の準備をするおりんの姿に、留学生たちは「信じられない！」と言いつつもある種の感動さえ覚え始めているようであった。

そして**第二の例はおりんの家族に対する愛と死への決意である。**おりんは榎山まいりの日のことばかり考えていた。おりんの思いが小説の中で次のように描かれる。

「わしが山へ行く時は祭りのときと同じぐらいの振舞いができるぞ、白萩様も、椎茸も、やまべの乾したのも家中の者が腹一杯たべられるだけ別に用意してあるのだ。村の人に出す白萩様のどぶろくも薄めては作ったが一斗近くもこしらえておいたのを、今は誰も知らないだろう、わしが山へ行ったそのあした、家中のものが、きっと、とびついてうまがって食うことだろう。その時になって〈おばやんがこんなに！〉ってびっくりするだろう。その時はわしは山へ行って、新しい筵の上に、きれいな根性で座っているのだ。」¹⁰

ここには後に残る人たちへのできるかぎりの思いやりが描かれる。おりんは自らの榎山まいりのために一年で一番楽しい「祭り」と同じぐらいの食べ物や飲み物を準備している。他方でおりんは決然として家族と村の人たちから別れを告げようとする。自分の死は自分で決めるという強固な意志である。次第に留学生たちはおりんの生き方に畏敬の念に似たものを抱き始める。

さて**第三の例は、榎山まいりに行く前の晩に振舞酒が出され、そこで榎山まいりの際の「掟」について語られる場面である。**¹¹掟は四つ語られる。その一つ目は「お山へ行ったら物を云わぬこと」、二つ目は「家を出るときには誰にも見られないように出ること」、三つ目は「山から帰る時は必ずうしろをふり向かぬこと」、四つ目は決まった道順で「神様」が待っている榎山に行くこと、である。八人の村の代表がおりんの家に呼ばれ、それぞれがそれらの「掟」を厳粛に述べながら、振舞酒を甕から飲めるだけ飲むのであった。榎山に住む神様に迎えられるためには、厳格な掟を守らなければならないということを読み解いていった留学生たちは、あの有名なギリシア神話のオルフェウスが、死んだ妻を冥界から呼び戻す際にうしろを決してふり向いてはならないという掟があったことを思い起しながら、日本の

⁷ 深澤七郎：前掲書、7頁。

⁸ 深澤七郎：前掲書、5頁。

⁹ 深澤七郎：前掲書、13頁。

¹⁰ 深澤七郎：前掲書、38頁。

¹¹ 深澤七郎：前掲書、55-56頁。

伝説にもそういうものがあつたのかということ意識しつつ、西洋と東洋の不思議な類似性に思いを馳せていたのであつた。

留学生たちはもうこの頃になると、この小説に対する最初のあの驚嘆しつつも、拒絶的であつたある種の異文化への態度を陰に潜めてしまっていた。それは勿論おりんの死に対する畏怖とも思われるありようからのみ原因があるのではなかつた。おりんの一人息子の辰平がおりんに対して限りなくやさしい態度を示していたこと、そして同時に辰平がおりんを榎山の神様のところまで背負って行き、最高の状態で死を迎えさせたいという慈しみの中にも毅然とした態度を見せたことも留学生たちを魅惑した。とりわけおりんの榎山まいりの日が決まったとき、辰平は寝転んで額に雑巾を当てていたが、目には悲しみに涙がいっぱいになっていたことがわかったとき、留学生の一人は「辰平はやさしいね。」とぼつんと語った。

辰平が背板におりんを背負って、四つの山を越え、七曲りの道を抜け、七谷を越え、やつのことで榎山に到着し、骸骨の居並ぶ神の地におりんを下ろして後ろ髪を引かれる思いで下山しているとき、丁度雪が降り始めた。辰平は「うしろをふり向かぬこと」、「物を云わぬこと」という榎山まいりの固い「掟」をうち破り、走って置いてきたおりんのところにもどり、「おつかあ、雪が降って運がいいなあ・・・山へ行く日に」と叫ぶ。おりんがそのまま眠るようにして死の世界へ行くことができるからである。

「私は辰平の心が好きだなあ！」と感動して留学生の一人がつぶやいた。留学生たちは一様に、おりんの決然として神の懷に抱かれて死を待つ雪に覆われた真っ白い姿と、永遠の辛い別れに泣きながら立ち去る以外にない辰平の姿とを想像して、そこに鬼気迫る中にも何か美しいものの存在さえ感じていたのである。

かくして筆者の期待、すなわち留学生たちはこの小説に感動するであろうかという一縷の望みは、大いに実現されたのであつた。

Ⅲ. フランツ・アルトハイムの『小説亡国論』における小説批判

典型的に日本的な作品と思われる『榎山節考』が、日本人のみならず、留学生にも感動を与えたということは重大なことがらである。それは「身震いすることは人間の最上の持ち前だ。」¹²という格言があるように（文豪ゲーテ）、まさに『榎山節考』が民族を超えた「人間」の心の深部をも揺り動かしたことを意味する。

しかしそれでは一体この小説のどのようなところが留学

生の琴線を揺らしたのであろうか。一体万人の心を揺らす感動の源泉はこの小説のどこに見出されるのであろうか。筆者は感動の源泉について、前章でおりんと辰平の鬼気迫る榎山まいりの中にも何か美しいものの存在が感じられた、と書くことによってそれを解き明かそうとしたが、そういう表現はあまりにも感覚的表現に過ぎて筆者にはどうも落ち着かなく感じられる。もう少し論理的な根拠を探さなければならない。

そこで取り上げられるのがドイツの著名な古代史学者（ベルリン大学教授）フランツ・アルトハイム Franz Altheim（1898-1976）の著書『小説亡国論』¹³である。ここでアルトハイムを取り上げるのは、彼の論文が特に深澤七郎のことについて言及しているわけでは勿論なく、我々が『榎山節考』の「感動の源泉は一体どこからくるのか」ということを問い掛ける際に、彼の論文は決定的な示唆を与えてくれると思うからである。

以下アルトハイムの『小説亡国論』の概略を述べながら、彼の「感動の源泉」についての考え方を解き明かしていくことにする。尚、引用箇所は括弧内には同書の頁数を記す。

まず彼はこの著の中で、近代（19世紀）以降小説が文学を牛耳っていると力説する。叙事詩も劇も抒情詩ももはや書かれなくなって、小説専横の時代が到来しているというのである。なぜそれほど現代が小説専横時代なのかというと、小説は何でも自分の思う通りに書くことができ、現代もまたそれを赦す自由な時代だからである。だから小説は「ひとつの巨大なカオス」であり、ここには、もろもろの「技芸、学問、職業、さらに歴史、哲学、宗教の総体など、一切がある。」（17頁）叙事詩と悲劇は閉ざされた形式であるのに対して、「小説にふさわしいのは開かれた形式」（18頁）なのである。

このように彼は述べた後で、しかし小説は、個性的であり、自由であり、開放的であり、カオスであるからこそゆえに、デカダンス（頹廢的）やニヒリズムやフェミニズムであるとして小説を次のように徹底的に断罪する。小説は、形が無く、すでに「意識を失った国の生き物の群を自分自身の中に吸い込む」（123頁）世界都市と同じで、そこに見られるのは「根無し草の知識」であり、「教養の蔓延」と「教養の平板化」であり、「魂の貧困」と「最小限の努力で身に着けようと願う飽くなき読書欲」であり「現実感の乏しさに由来する一種のロマンティシズム」（124頁）であり、それは「大都市文明末期の土壌の上」にあるものと同じだといふのである。そして小説は現実から知り得る事柄と勝手気ままな作り話との見境がつかないから、小説は「常に拘束の外にあり、義務を免れている。」別の言い方をすれば小説は「個人的なことに対する配慮もなければ、偉大なもの

¹² J.W.v. Goethe: *Faust II*, *Finstere Galerie*, Vers 6272.

¹³ フランツ・アルトハイムは、2巻本の著書『古代末期の文学と社会』*Literatur und Gesellschaft im ausgehenden Altertum* (1948～50) を公刊したが、その第一章が『小説亡国論』*Roman und Dekadenz* というタイトルで日本語に翻訳されている。フランツ・アルトハイム：『小説亡国論』福田宏年訳、中央大学出版部、1996年。

に対する畏敬の念も欠ける。」(103頁)つまり小説は、「祭式との連帯が欠如して」(95頁)いて、小説は読者に「弛緩と溶解」を促し、「厳しい現実を避けて通させる」(119頁)というのである。そして小説では好んで男女の恋愛が取り上げられるが、そこに出てくるのは夫婦愛や母性愛でもなければ、家や家族でもなく、あるのは「好色心と洗練された手管」(118頁)であると彼は書く。

こういう小説専横時代になると、人びとは実生活の中にも小説を求めるようになり、だから社会全体が頹廢的、ニヒリズム的、フェミニズム的になってくると次のように彼は警告する。

「デカダンスの社会では、少なくとも、避けようのない最終的な崩壊が始まる前は、たいてい居心地のいいものである。」(41頁)

「恋愛や性生活の夢を読者は現実の中に無理にもねだって求めるようになる。読者は実際の生活でも義務に縛られない生き方を選び、恋愛や、夫婦関係の中の恋愛の魅力や、義務遂行の夢を求めるようになる。」(119頁)

このようにアルトハイムは、小説は読者を頹廢に貶めるものなのだから、小説とはその時代にとって極めて危険な文学であると断罪するのである。そして古代史学者らしく彼は、紀元2世紀から3世紀前半にかけてローマ世界でパピルス上に数々の小説が執筆されたことと同時にその受容が異常なまでの昂まりを見せたことを問題¹⁴にし、このローマ時代もまた人びとはデカダンスに陥ってその後は戦乱の時代に移行していったと指摘するのである。すなわちアルトハイムは小説とデカダンスとの関係を暴き出す為にもここでもまた古代の小説と現代の小説を比較しているのである。

IV. フランツ・アルトハイムの称賛する小説

ところでそういうアルトハイムの小説批判の中でも、しかしアルトハイムが称賛する小説があることを我々はここで特筆しなければならない。アルトハイムによってほとんどの小説が上述のように徹頭徹尾あれだけ非難されたのだから、それだけいっそう次のように二人の小説家の小説が称賛されることの意義は重大のことに思われてくる。アルトハイムはイタリアの小説家ガブリエ・ダヌンツィオGabriele D'Annunzio (1863-1938) の小説『そうかもしれない、そうでないかもしれない』とイギリスの小説家D・H・ロレンスDavid Herbert Lawrence (1885-1930) の短編小説『狐』や『てんとうむし』等を取りわけ称賛している。それでは一体これら二人の小説の何がそんなにアルト

ハイムを惹きつけたのであろうか。簡単にそれを表現するならばそれは「根源神話」ということになる。「根源神話」が二人の小説の根底を形作っているものである。以下二人の小説のそのことについて述べていくことにする。

ダヌンツィオの小説『そうかもしれない、そうでないかもしれない』はイタリアの古代神話から素材を得たものでありイザベラとタルシスの運命を描いている。女主人公のイザベラは「インド・ゲルマン族以前の層に深く根ざす町の出身」であり、「根源の世界に対しても近く親しい」ものを持っていて、従って「冥府の地下の力と結びついた女神」のように力強く、「華やかでありながら死の臭いのする、豊満でありながら戦慄的である。」一方タウリスは「明晰さを志向する明るく男性的なギリシアの遺産」(75～76頁)を持つ神々の子である。イザベラはタルシスの明るさを憧れながらもそれが適わず、狂って近親相姦に陥り破滅していく。イザベラは、古代ギリシアの悲劇詩人エウリピデスEuripides (紀元前484年頃－406年) の悲劇『メディア』の女主人公メディアと重なるものを持っている。メディアもまた根源に潜むデモニッシュな野蛮な女の正体を顕わすからである。それと対称的な男性イアーソンは、抑制の強いギリシア人であり、メディアの激情の行為と対立する。そしてこの悲劇『メディア』の中でも女と男の根源の原動力がぶつかり合い破滅へと陥っていく。

ロレンスの短編小説もまた「絶対的な神、つまり非人間的な神を非難し、古代の歴史や地理学に出てくる、小さくて、相対的で、従って人間的な神々に肩入れする。」(79頁)ロレンスの云う絶対的な神とは、例えばギリシアの女神アテネが祀られているパルテノン神殿の幾何学的なもののことが考えられる。そこには「妥協の余地のない純粋に幾何学的な形」(84頁)が全体を支配している。ロレンスは理性によって支配された神ではなく、それより以前の深い動物の、より人間的な神々を追い求める。ロレンスはそのことを象徴的に次のように言っている。

「血と肉への信仰は私の偉大な宗教です。血と肉は理性よりも賢明です。私たちの持っているいろいろな思想に頼っていると、道に迷いかねません。しかし血が感じ、思い、言うことは、常に真実です。」(85頁)

ロレンスの求めているのは従ってダヌンツィオと同様に「根源宗教」の世界である。飼い慣らされた文明を突き抜けて魂と肉体、本源的でより自然な生き方へと衝迫しようとするありようである。それはアルトハイムが指摘するようにハンガリーの古代神話学者K.ケレーニーイKarl Kerényi (1897-1973) の「根源神話」、「根源宗教」とも重なり合う。根源神話とは「この世界と同じくらい古いもの」(71頁)で

¹⁴ 例えば初めてキリスト教を公認したことで知られるコンスタンティヌス1世Constantinus I (280頃－337) の時代に古代小説が書かれた。

あり、それは根源種族、根源文化、根源文字、根源故郷などと言ってもいい。だからこういう神々と神話は「最初から民族の区別を越えてどの民族にも現れる」(68頁)とケレーニーイは云う。例えばケレーニーイは、ギリシアのヘルメスとディオニソスという神々が、フィンランドの古代叙事詩『カレワラ』の中で、一人の子供の中に変容して合体しているのを発見する。さらにケレーニーイは、根源神話は世界のあらゆるところで変容して現代でも生きていと説く。例えば古代ギリシアの女神コレーは、インドネシアの少女神ハイヌウェレに変身して生きているというのである。従って根源神話は「太古のものでありながら常に現存する」(81頁)ものである。

このようにしてアルトハイムは、ダヌンツィオとロレンスの小説の中には根源神話の姿が見られるということを、ケレーニーイを援用しながら解き明かしたのである。

V. 根源神話と『榊山節考』

『榊山節考』の感動の源泉はどこから来るのであろうかという疑問から、筆者はこれまでアルトハイムの『小説亡国論』を取り上げてきたのであった。そしてその中で小説専横時代が到来していること、そして小説というものは社会をデカダンスに陥れる危険な文学であること、しかしダヌンツィオとロレンスの小説は、その中に根源神話を孕んでいるゆえに飼い慣らされた文明を突き抜け、根源にひそむものに触れ得る力を持った文学であること、つまりそれは人間以前の動物的な深淵に触れさせることによって飼い慣らされた文明に風穴を開けさせ、革命させることのできる文学であること、を論述してきたのであった。

筆者は『榊山節考』の感動の源泉もまた、アルトハイムの説く「根源神話」と同じ次元から来ていると考える。『榊山節考』における根源神話とはこの場合「姥(嬢)捨伝説」のことである。「姥捨伝説」は太古にも存在し常に現存するものだからである。「姥捨伝説」は大昔から世界中に存在する。インドにも中国¹⁵にも、そして日本各地¹⁶にも存在する。ドイツでは、グリム童話の中にも姥捨に類似する昔話が存在する。¹⁷ 深澤七郎自身もこの小説を書く前に、生まれ故郷の石和の近くにある山沿いの農家(滝川村の大黒坂)の年寄りから、「飢餓の時には大昔、どこでもそうだった

が、孫ができると年老いた者は村の奥の春日山に捨てられた」¹⁸という話を聞いていたのであった。そしてその昔話を発酵させ書き上げたのが『榊山節考』であった。従ってこの「姥捨伝説」は「太古から存在し、現在でも生きている」根源神話なのである。

なるほど最近、古田武彦がその著『姥捨て伝説はなかった』¹⁹の中で、「おば(姥)」は「神に仕える女性」、「す」は「住ま居」の「す」、「て」は「あたり一帯」と解釈し、「おばすて」は「巫女たちの祭りの場」という意味で、実は昔からの「姥捨伝説」はなかったと新しい説を提出しているが、そういう歴史的事実の問題についての正否はもう少し歴史家たちの研究成果を待たなければならないが、いずれにせよ大昔から「姥捨伝説」は色々な形で語られてきたのであるし、現代ではまさに深澤七郎によって文学作品にまで高められている。

さらに社会的には「姥捨て」は「高齢者福祉」という文化的な名前を冠して、現代21世紀の大きな問題としてアクチュアルに存在する。老人を捨てるか捨てないか、老人の死をどうやって見守るか、老人を老人ホーム、介護施設に入れるか入れないか、介護施設に入れるのは子ども達が介護の苦勞から解放されたいがためなのか、もしそうであるとするならば介護施設に入れるのは「榊山まいり」に行くのと同じことなのではなかろうか、老人だけではない、自分が高齢者になって死に近づいたら自分の生をどのように完結させたいか、子どもの世話などならずに、子どもに迷惑などかけずに自らの意思で死を迎えるためにはどうすればいいのであろうか等々、こういう問いはすべての人間が持つ根本的な問いである。老人の死をどうやって見守るかという問題は、古代から現代にいたるまで家族を持つあらゆる人間の心の奥深くに沈殿している根源的な問いかけなのである。それは日本人であろうと、オーストラリア人、スウェーデン人、ロシア人、インド人であろうと、すべての人間が持っている「根源神話」なのである。日本人だけではない、留学生たちの心の奥深くにも沈んでいる「根源神話」なのである。

それはまさに「飼い慣らされた文明」を突き抜けてさらに太古にまで遡る動物的な、ロレンスの言う「血と肉」と結びつく根源神話である。子孫のために自ら死を選ぶというありようは、突き詰めると動物の本能にまで遡る。鮭は

¹⁵ 『世界宗教大事典』平凡社、1991年、225頁。インド：仏典『雜寶藏經』に古く載っている。棄老国の王の夢に天神が現れて、難題を解けない場合は国を滅ぼすと告げ、老人がその難題を解いたので、それ以後、棄老は廃止されたという。中国：『老子伝』に載っている。原谷の知恵によって祖父が捨てられずに戻るという内容である。

¹⁶ 『日本伝奇伝説大事典』角川書店、1990年、221頁。この姥捨伝説は、日本ではこれまで色々な書物に登場してきた。すなわち『古今集』、『古今六帖』、『新選和歌集』、『大和物語』、『俊頼髓脳』、『今昔物語集』、能「姥捨」などである。その他各地にそのような昔話、伝説は存在する。

¹⁷ ヤコブ・グリム、ヴィルヘルム・グリム Jacob u. Wilhelm Grimm: 『グリム童話集』Kinder- und Hausmärchen, 金田鬼一訳、岩波文庫、1994年、「こじきばあさん」(KHM150): 寒さに震えて行く当ての無いこじきばあさんが、親切な若い男の家で暖炉にあたる。暖炉の火がこじきばあさんの服に燃え移るが、その若者はしかしそれを見て見ぬふりをする。こじきばあさんは焼け死ぬという恐ろしい話。

¹⁸ 浜野茂則: 『伝記小説 深澤七郎』近代文芸社、2000年、56-57頁。

¹⁹ 古田武彦: 『<姥捨て伝説>はなかった』新風書房、2002年。

産卵のために壮絶な死を選ぶ。生のための死。それは自然の根源法則が支配する世界である。それはゲーテのあの「至福なる憧憬」の詩の中にある「死して成れよ」Stirb und werde!²⁰の次元である。

それはもはや神秘の世界に属する。それは汚すことのできない神聖な領域である。「榎山」には神が住んでいるというのはそういうことを意味する。神聖な場所といえば、鮭の産卵の場所も必ず神秘的な山奥にある。鮭もまた、海でのほとんどの生活を終え、子孫を残すために湧き水の出る山の奥にある神秘の場所にまで身を粉にして登りつめ、そこで産卵をし、そして死んでいく。人間と鮭を同類に扱うのは不見識に思われるかもしれないが、それは根源神話が人間の理性によって作られた文化文明を突き抜けて、それよりもっと古い、太古の世界にまで遡り、動物的欲望に根を持っているからである。そういう「榎山」も聖なる場所であり、「榎山まいり」のためにはだから誰でもが神聖な「掟」を守らなければならない。「お山へ行ったら物を云わぬこと」、「家を出るときには誰にも見られないように出ること」、「山から帰る時は必ずうしろをふり向かぬこと」、「決まった道順でく神様」が待っている榎山に行くこと」という神聖な「掟」が存在する世界である。アルトハイムは、根源神話は「祭式と結びつく」²¹と書いているが、『榎山節考』もまたこういう「儀式」と結びついていることを特筆しなければならない。

そしてこういった神秘性は小説の中で「3」と「7」の数字が繰り返し色々なところで使われることによって倍加される。例えば、「70」になると老人は「榎山まいり」に行かなければならない。榎山に行くには「七」曲りの道を抜け、「七」谷を越えて行かなければならない。そういえば作者深澤七郎の名前にも「七」がつくことは面白い。²²「3」の数字などはこの小説の中に31回も出てくる。例えば、榎山へ行く途中、「三つ」目の山を登っていけば池がある。池を「三度」廻って「三段」の石段を登る、といった具合である。あるいはおりんの立派な歯（鬼の歯）は33本もある、と書かれる。このようにして「3」や「7」の数字が繰り返されることによって普通の出来事が神秘的なものへと変貌するのである。

深澤七郎作詩作曲の数々の「榎山まいり」の歌がこの小説に組み込まれているが、それもまたこの小説に神秘性を与えている。歌、つまり詩は、散文と違ってそこに凝縮された意味が込められているからである。

「姥捨て伝説はなかった」と主張する古田武彦は、なかったというその根拠の一つに「一家に食いものがなくなった

ら、親子みんなで、腹をへらしてがんばる、っていうのが本当じゃないかな。＜食い物へらし＞に親を捨てる、なんていやだよ」²³という発言を引き合いに出しているが、まさにそれは「飼い慣らされた文明」の世界での発言である。誰かが死ななければ子孫が生き残れないほどに生活が苦しい状況に直面したときに、「親子みんなで、腹をへらしてがんばる」という言葉は戯言にすぎない。人間は自分だけは生き残りたいと望むのが普通だ。人間だれしも死ほど怖いものがないからだ。それを突き抜けた世界は、それよりもはるかに壮絶な動物的な愛の本能にまで触れる世界である。おりんの「榎山まいり」とそれをいやいやながら手助けする辰平の姿は、恐ろしく、壮絶だが、しかしそこには壮絶故の美が宿っている。

「姥捨て伝説」を大黒坂の農家の年寄りから聞いた深澤七郎は、それを彼の実母の「自分自らの意思で死におもむくために餓死しようとしている」²⁴壮絶な死とからめながら、『榎山節考』の中におりんと辰吉という根源神話の典型的な登場人物を創造したのである。

＜補 遺＞

スウェーデンのアダム・ダールストローム君は、国費研究生として北海道教育大学釧路校で日本文化を研究してきた。とりわけ彼はこの『榎山節考』に関心を持って筆者の指導を受けた。彼の論文には意味深いものがあると思われるのでここに掲載することにする。

『榎山節考』とスウェーデンの小説『移民』

I. Nationalroman(民族小説)はどういう文学類型であろうか

ドイツで「Nationalroman」といわれるジャンルの特性を比較してみると、「榎山節考」に似ている点がいくつかあると思います。「Nationalroman」ははっきりと定義されたジャンルではないのですが、1850—1930頃、特に中欧と西欧で愛国主義的な作品は「Nationalroman」と呼ばれましたが、戦後この表現の意味は変わりました。工業化した国々の人口の大部分は、元は労働者階級でしたが、次第に彼等は質素な生活を忘れずに、しかも高い教育を身につけた中産階級になりました。新しい中産階級は小説の読者となり、そしてそれと同時に小説の形も変わりました。教育、仕事、娯楽を同じように経験しているので、元の中産階級と新しい中産階級との区別はなかなかつけにくくなりました。そして歴史についての考

²⁰ J.W.v.Goethe: *Divan. Buch des Sängers. Selige Sehnsucht.*

²¹ アルトハイム：前掲書、95頁。

²² 浜野茂則：前掲書、75頁。この深澤七郎の「七」は、彼の故郷の神聖な名前に因んだものだった。つまり深澤七郎の故郷には身延山がありその山奥には七面山があり、七郎の名は仏教信仰の厚い両親によってその山に因んで付けられたのであった。

²³ 古田武彦：前掲書、55頁。

²⁴ 浜野茂則：前掲書、70頁。

えや国民がどのように形成されてきたかということが次第に希薄になってきました。国際化された現代の世界の中で、国民や民族の特性を促進するために、あるいは民族の起源を再発見するためには「国民感情」を煽る新しい有りかたが必要でした。それが「Nationalroman」であると思います。

II. 現代の「Nationalroman」

上で述べたように、「Nationalroman」は元々民族主義を唱える小説の表現でありましたが、大きく変わった戦後世界では、「Nationalroman」は、庶民の読者層に「民族感情」をアピールしています。不思議なことに、現代の「Nationalroman」はほとんど昔の時代のことについて述べています。それは現代人が「民族感情」を喪失してしまい、昔の人たちの「民族感情」の方がより民族的であり、そこに羨ましさを感じるからではないかと思えます。不思議なことは、現代人はほとんど昔のような生活を経験していないのに、その昔の生活に懐かしさを感じているということです。その上、現代の「Nationalroman」の読者は、昔の世代より経済的に豊かで、高等教育を受けることが可能になりました。なお、自分達の先祖が質素な生活をしていただけに、今の幸福に満ち足りた庶民は昔の貧しい生活にはもどりがたがらない。したがって、現代の中産階級の庶民は、昔の先祖たちは貧しかったということはなるほど認めますが、それがどのように貧しかったのかということははっきり言うことができないのです。どれほど試みても、現代の著者は昔の人間の生活状況を完璧に叙述できないのだから、現代の「Nationalroman」は現代人の意識に基づいて過去の人間のありようについて叙述しているわけです。

III. スウェーデンの「Utvandrarna」四部作について

スウェーデンでは、多分一番知られている「Nationalroman」と言われる作品はVilhelm Moberg著「Utvandrarna」日本語訳：『移民』四部作であります。このよく読まれている四部作は、1850-1910年、アメリカへ移民した百万人のスウェーデン人の一家について書かれていて、主に夫のKarl-Oskarと妻のKristinaの人生が描かれています。この時代には、総人口の二割ぐらいがスウェーデンから移民したので、スウェーデンの歴史や「民族感情」がとりわけそこに描かれているわけです。Karl-Oskar達は「statare」という人間でした。「stat」は「国家」という意味で、「statare」とは、国家や地元の金持ちに雇われ、農場に住み込み、働いている人たちのことを言いました。農奴と違うのは名前だけでした。彼等は名目上の賃金や食物をもらっただけなので、「statare」にとっては国内で成功する可能性はほとんどありませんでした。だから彼等のほとんどは粗末な賃金を数年間で貯え、ようやくアメリカへの片道乗船券を買ったのでした。だからア

メリカから帰国したスウェーデン人はほとんどいませんでした。移民の人たちは主にアメリカの港町に到着すると、内陸の農場に向かわず、港で悪事を働いて捕まってしまうのでした。彼等は学問もなく抑圧されたスウェーデン人でしたからアメリカで言われたことは全然信じませんでした。Karl-Oskarは常に飢餓に苦しんでいたもので、唯一この貧困を脱出する方法、すなわち誰でもが土地を持つことができるというアメリカ移民への夢をかなえることばかり考えていました。しかし全財産を売って、命がけで家族を未知の大陸へと連れていくほどまだ絶望には陥っていませんでした。ですが、或る日、Karl-Oskar家の末っ子が、ポリッジの壺を見つけます。それは客のためにわざわざ妻のKristinaが隠しておいた高価な食べ物でした。ひもじい思いをしていた末っ子は我慢できなくなりそれを全部食べてしまうのです。そして末っ子はあまりにそれを食べ過ぎたために、亡くなってしまいます。これがきっかけでKarl-Oskarはアメリカに絶対渡ろうと決心します。

IV. 榎山節考について

榎山節考には一見したところ「Utvandrarna」との共通点がありません。おりんと呼ばれる老婆は乏しい山村に住んでいて、来年七十歳となる年に榎山参りへ行って神の住んでいるところで死ぬつもりでいます。この慣習は乏しい村で食物が足りないとき、老人が家族の負担にならないように自殺のような形で山参りへ行かせていました。なお、おりんはこのような習慣に従って家族の役に立つことを望んでいました。おりんの山参りが行なわれるまでに、次のようないろいろなことが起こります。つまり隣の家の旦那が食物を盗んだ故にその家全員が殺されてしまうこと、老婆なのにまだ立派な歯が皆残っているのが恥ずかしくて、おりんは自分の歯を石臼で折ってしまうこと、おりんの息子辰平の長男が、だらしのない役立たずの女を家に入れることなどが述べられます。山参りの準備は掟に沿っておこなわれ、おりんはそれを省略せずに行きます。となりの家の老人は絶対に山参りに行きたくないので逃亡するのですが、孫に捕まえられ、榎山の途中で谷底へ蹴落とされてしまいます。榎山参りにおりんを連れて行く役を演ずるのは息子の辰平です。彼は榎山参りの途中でおりんを捨てて帰ってきてもかまわないと言われます。

V. 「Nationalroman」の特性

「Nationalroman」の場合、民族感情をアピールするための二つの均衡ある語り口が必要です。一つは、現在ではもう無くなってしまっている生活を叙述することです。そういう生活は現代では存在しないので現代人には未知のものだからです。現代人はその生活と自分の生活との共通点を認めるのではなく、そういう未知の生活、

未知の文化遺産、未知の伝統を知って学ぶということになります。登場人物は、過去の歴史の中で動き、現代人よりもより日本人らしい質素な生活をしています。それはだから祖先の日本を垣間見させてくれます。

「Nationalroman」の人々にとっては、民族感情との一体感が問題なのです。国際化した現代の世界では、一体感を感じるような境界線を設定したり、質素な生活をしていた昔話に自分たちの源を見つけたりしています。二つ目のものは、「Nationalroman」の物語の主人公が、真に純情なほど質素で、自分で選択することのできない小さな世界に住んでいるということです。唯一絶対の話に感動させられ、単純でまっすぐな道に向きを変えずに歩む人間の話に納得させられます。「自由に選べることは祝福であると同時に呪いである」という意味を民主主義の国に暮している現代人はよく分かっているのでしょうか。逆に、「自由に選べないことは呪いであると同時に祝福である」という意味を昔話を通して理解し、楽しんでいきます。民主主義は、人間の長い歴史の中で最近流行しているものにすぎないではありませんか。自由選択はまだ正当性を勝ち得ていません。

VI. 「Utvandrarna」にはこの特性があるか

「Utvandrarna」には、スモーランド地方で抑圧されていた乏しい農民の生活がよく書き表されています。Karl-Oskarは忠実で勤勉な人で、問題はアメリカに行くべきかどうかということです。スウェーデンの読者は、150年前のスモーランドの乏しさに感動させられて、アメリカに移住せざるを得ない状況に納得させられます。Karl-OskarとKristinaは純情ほど忠実なので慾もなく単純な性格の人間です。アメリカへ移民の問題は元々子供の将来のためです。社会民主主義のスウェーデンにとっては、昔話はよく抑圧のテーマとして語られます。昔の庶民は何の権利もなく義務だけの生活で厳冬を地主からの何の援助もなく過ごさなければなりません。ですからこの時代の話はほとんど自分たちの生活をうまくやっていけるかどうかについてのみ語られています。著者のVilhelm Mobergはだから現代の民主主義も無意味ではないということをお願いしたいのではないかと思います。生前、著者はスウェーデンで有名な自由主義的批評家でありました。この小説では、昔の唯一絶対の選ぶことができない生活の中で、自分の生活のために別な選択を実行することができるかと著者は尋ねていると思います。

VII. 檀山節考にはこの特性があるか

「Utvandrarna」のように、「檀山節考」では乏しい農家の村が語られます。しかし敵対しているのは「Utvandrarna」のように政府や地主ではなくて、ただ状況の激しさだけです。現代の日本は、スウェーデンのように長い民主化の影響がないので、治めるか治められるかという

ことは「国民感情」の気になるテーマとはならないからかもしれません。古代の人間が不平等に扱われていたということがスウェーデンの「Nationalroman」の一番大事なテーマであると思います。日本の場合は、個人が苦しい生活の中でどう生きていくかということに関心があるのかもしれませんが。おりんは最初から絶対に山参りへ行くつもりであります。おりんの伝統を守るという決断力の強さ、また年を取っても立派な歯が残っていることは恥である、そういうことは教養のない頑固な人間の姿ようにも見えます。この選択ができない世界は白黒の世界です。時代の常識に逆らうものに読者は出会います。孫たちの無責任さや恩知らず、そして生存の苦しさなどはこの複雑でない残酷な世界の白黒さを深めています。

VIII. 結論

二冊とも壮麗さを持たない英雄の物語りであります。現代人は古い伝統と新しいものの導入とのカオスの中で迷っています。なるほど「Nationalroman」を読んだ者は、民族の根源の印象を得られるようになって気持ちがすっきりするでしょうが、しかしやはりあの古さと新しさの混迷を解決することはできません。基本的には、「Nationalroman」は現代の人間にアピールするための話であります。純情な性格でしかもテーマの白黒さ、そしてまっすぐな道に焦点を当てただけでは歴史の源に到達できないだけでなく、ただの傲慢な追憶にしかありません。このジャンルは何よりもまず国際化した世界で迷っている人間は、民族性を強めたがっているのも、そんな理屈を分からなかった祖先の人間を自分より民族の代表に向いていると思わせるに十分なジャンルだと思います。